

学校だより

nizigaoka nizigaoka nizigaoka nizigaoka nizigaoka

令和6年8月30日
川崎市立虹ヶ丘小学校
9月号



虹ヶ丘

<https://kawasaki-edu.jp/2/511/nizigaoka/>

虹ヶ丘小学校
ホームページ ⇨



誰にとっても安心できる学校となるように

校長 井上 恵子

37日間の夏休みが終わりました。夏休みに作った作品や自由研究の模造紙、習字セットや道具箱、鍵盤ハーモニカ、防災頭巾や上履きなどを両手いっぱいを持って、汗をかきながら登校する子どもたちを見て嬉しくなりました。変わりなく夏休みを過ごしたことが伝わってきたからです。最近は、「あたりまえ」と思っていたことが当たり前ではなく、「ありがたい」ことだと思えます。海や川、交通事故など、子どもたちの身近では起きなかったようで安心いたしました。

災害や事故はいつどこで起きるかわからないものです。事前の備えとして、日々の暮らしを見直すことが必要です。私は、8月9日に起きた地震に驚き、次の地震がやってくる前にと一念発起して、家の中を片付け始めました。我が家は、本が多すぎて、本棚に並びきらず、床に積み上げています。それでも、読みたい本を次々と注文してしまうものですから、その積んだ本が2重3重となっていました。9日の地震が私を目覚めさせてくれました。「このままでは、本が崩れて部屋のドアが開かなくなる。部屋の入口付近には本や家具を置かないぞ」と決意し、本の整理を始めました。同じ本を2冊も購入していました。なんと、読んでいない本がたくさんあることでしょう。整理にかなりの日数を要しました。現時点で魅力を感じない本を古本屋さんに持っていくことにしました。整理中に「自衛隊防災BOOK 危機管理のプロが直伝！100のテクニック」(マガジンハウス)を見つけました。何年前かに、防災の話を子どもたちにしようと思って購入したものです。開いてみると、1つ目が『自宅の家具配置を見直す』でした。「胸よりも高い位置にはなるべく置かない」「本棚は入り口から遠くへ」とあり、私のこれまでの片づけは、最重要だったのだと確信しました。子どもたちにも、8月26日の朝会で、1923年9月1日関東大震災の話をしました。「備えあれば憂いなし」という言葉とともに、「もし、ここで災害が起きたら」と想像することが大事だと伝えました。何事もなければそれが一番です。

夏休み明けは、登校のプレッシャーが大きいと言われていています。友達のことや学習が心配、時間が管理されていることのストレスなどで、学校に行きたくない気持ちが膨らんでしまうのでしょうか。学校では、子ども一人一人のわずかな変化を見逃さないことを心がけています。そのために、日常的に子どもと会話をし、変化を察知したらよく話を聞くようにしています。子どもたちには、一人で抱えこまず、相談してほしいと思っています。この時期、読売新聞では特集を組んでいます。シリーズ1回目が、サッカー日本代表監督の森保一さんでした。小・中学校時代は友人関係で悩み、選手時代は挫折を味わったと書いてありました。「ダメな自分を否定せず、許し、ありのままを認めることで、乗り越えることができた」ということです。自分を否定せずすむためには、どうしたらよいのでしょうか。「この人と話をすると自分がネガティブになってしまう」と思うなら、「コミュニケーションを取る相手を変える」とよいのではないのでしょうか。また、「できない自分」に気づいた時には、自分を責めず、「それも自分だ」と積極的に肯定するとよいのではないのでしょうか。自分を認めることができたなら、成長への一歩を踏み出したことになると思うのです。自分を認めてくれる人は必ずいます。その人が味方になってくれます。だから、安心してほしいのです。

「先生は夏休みは何をしているのですか。」という質問を受けました。学校の夏休みは、個々の学びの時間となります。さまざまな研修に参加し学んでいます。夏休み明けの4時間授業の午後には、学んできたことを共有する研修と外部講師を招いた研修を行いました。先日は、前PTCA会長 前村嘉昭さんのコーチング研修を受けました。よりよい学校づくりを目指して、今後も学んでいきます。